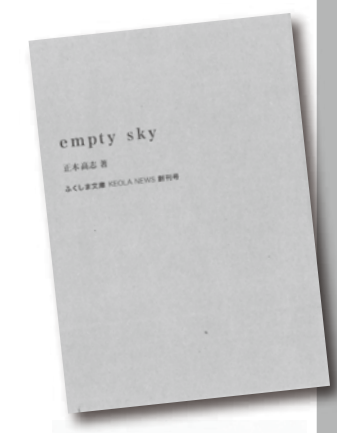


いのちを守る道を！

アンナプルナ農園正木さんからのメッセージ



『empty sky』
ふくしま文庫刊
正木高志著
1冊 500円

ふくしま文庫
No.4096 15-71 6/5

9条をまもる「いのちの憲法」

2020年に東京オリンピックが開催されます。

しかしフクイチがほんとうにコントロールされなければ、多数の国家が参加を見合わせる
ことになるでしょう。そうならないよう、政府は19年の春までに何としても終息のメド
をたてるつもりでしょう。

方法としては小出先生がおっしゃるように石棺で覆うしかないと思われます。そのために
は作業に携わる膨大な人員が必要です。

では、どうやってその人員を確保したらいいでしょう？
あなたならどうしますか？・・・
おそらく徴兵しかないのではないのでしょうか？
政府もそう考えていると思われます。

18年中に石棺で覆うには、18年のはじめに徴兵制をしなければなりません。
そのためには17年夏までに、憲法改定の国民投票を行う必要があるでしょう。
この4月28日には船田元自民党憲法改正推進部長が「2年以内に国民投票を行う」と
言明しています。

彼らは徴兵された若者たちに言うでしょう、「良い知らせと悪い知らせがある。悪い知らせ
は、君たちがこれから米軍と一緒に前線で戦わなければならないことだ。良い方の知らせ
は、平和主義者は戦場へいかなくてもよい。かわりにフクイチで働いてもらう。どちらを
選んでもいい。君たちは自由だ」。

3年後にそうなるかどうか、国民投票で自民党草案が可決されるか否かにかかっています。
そしてそれは、若者たちが投票にいくかどうかにかかっています。若者の投票率が80%を
超えるなら、自民党草案は否決されるでしょう。悪夢を見ないですむでしょう。
国民投票が18歳以上でなされるのは18歳から徴兵するためです。

311が起きるまで、私は「9条をまもろう」と考え、行動してきました。
しかし311によって、戦争放棄だけでは平和がまもれないことを思い知らされました。
放射能は多くの人々のかけがえのない故郷を人の住めない土地にしまいました。チェル
ノブイリなみの規制と住民保護を採用すれば、おそらく数百万人の原発難民が出ること
でしょう。

●今年3月、アンナプルナ農園の正木さんを訪ねた折、「ちょうど今、文
章を書いていて、もうすぐ小冊子にしようと思っているんだよ…」とおっ
しゃっていました。あれから2ヶ月、今年元にその本が届いています。
世界はどうしてこうなってしまったのか、そして私たちはどうすればよい
のか…。問題点とその答えがストレートに伝わってくる名著だと思います。
(裏面に一部抜粋しています) ぜひお手にとって、私たちが平和な世界を手

に入れるための道標にしていだければ幸いです。
また、本と一緒に届いていたメッセージを以下に転載しています。こちら
もあわせてご覧下さい。
どんな小さなことでも、私たちにできる何かがあるはず。その小さな
灯火を持ち寄り、あわせたなら、きっと世の中を明るく照らす事ができるの
ではないでしょうか。
(まほろば編集部 島田 浩)

平和憲法は、多分に、GHQに与えられたものであるでしょう。まして日本国憲法より上
位に日米合同委員会や日米原子力協定が置かれている現状であればなおさら、まもろうと
するだけでは、平和も9条も、まもることができないのではないのでしょうか。

戦後70年と後ろ向きにとらえなくても、グローバリズムという名の鬼つ子を産みながら
世界がグローバル化してゆく今日、その渦中の日本のあり方を、前向きに、ヴィジョンを
もとめ、創案し、掲げること。それが私たちの課題であるはず。です。

護憲か改憲かというメニューでは現状に飽きた国民の護憲離れを防ぐことはできません。
誕生の半世紀も前につくられた憲法をまもろうというモチベーションが、若者たちに勢い
よく湧き出すはずありません。参加する若者が少ないと嘆くまえに、護憲から踏み出せ
ないできた護憲運動の思考停止・機能不全を改める必要があると、自戒をこめて思います。

だからといって自民党草案がよいとは思いません。あれでは戦前へ帰れどといっているよう
なもの。苦しい歴史がふたたびくり返されるだけです。過去へ帰ることなどできません。
多くの若者が国民投票で自民党の改憲草案に×をつけるには、9条をまもるための新しい
改憲メニューがなくてはなりません。

ヒロシマをくり返さないために平和憲法が生まれたように、311を経験した日本には、フ
クシマをくり返さないための、いわば「いのちの憲法」が必要です。
国に原発を作らせず、売らせず、運転させず、再稼働させず、すべての原発を廃炉にさせ
るための「いのちの憲法」。

いのちの憲法には平和憲法の理念が内包されるでしょう。
憲法9条は、一字一句変える必要はありません、変えてはなりません。
そのうえで平和憲法に生命の憲法を加えた生命平和の理想を掲げましょう。
その実現こそ、フクシマを引き起こした日本人の使命ではないのでしょうか。

新しいヴィジョンに映したとき、自民党草案が赤面して逃げ出ししてしまうほど美しい、日
本の新しい憲法を想像しましょう。それはきっと日本にとどまらず、
地球市民社会の理念として世界から歓迎され、アメリカも認めざるをえなくなるでしょう。

「戦前帰憲草案」と「生命平和憲法草案」、どっちがいいのでしょうか？

2015年憲法記念日に 正木高志

4 非二元論

生命の織物

からだは休むことなく湧いて流れてい
る。細胞のほとんどはこの3ヶ月間に食べ
たものからできている。
その食べたお米や野菜や魚などは何か
らできているか。土から吸収された栄養
や、水や太陽の光、あるいは魚が食べた
ものだ。
からだは食べたものからできており、
食べられたものも、それぞれが食べたも
のでできている、さらにそれらも食べら
れたものからなっている……私たちがど
んなに複雑に密接に環境とむすばれ、つ
ながっていることだろう。
からだだけでは足りない。歩いたり、笑っ
たり、働いたりする運動も、食べものが
燃焼するエネルギーだ。食べなければ、
立つ力もない。植物が生み出す酸素がな
かったら、一瞬だって生きていられない
。それなら人と環境の間にどんな区別が

る幻影にすぎない。それは実在ではない。
ほんとうの私は、あらゆるものとつなが
っている「大生命」だ。
空間的に、分かれていない「生命の織物」
の一部であるだけでなく、時間的にも、
分かれていない「大いなる生命」の先端
で生きている……珊瑚礁の先端でゆれる
サンゴのように。

みんなつながっている

カモメになって海の上を飛んでみよう。
空から眺めると、さざめく無数の波はバ
ラバラではなく、じつは一枚の海面だと
いうことがわかる。
波はみんなつながっている。分かれて
などいない。広大な一面の海が、風にあ
おられて、無数の波頭をたてているだけ
。もしも波が分かれたとしたら、奇蹟だ。

一個の波頭の日から見れば、自分と他
の波は分かれて見える。個々が勝手にバ
ラバラに運動しているように見える。だ
けどほんとうは、すべての波はつながっ
ている。運動もつながっている。自分ひ
とりで動いているわけではない。だから
シンクロがおきる。

あるというのだろうか？
ない……違いや区別はない。
つながっているというより、もともと
分かれていない。
環境とは「周囲」という意味だけれど、
それは自分を中心においたとき、仮にそ
のように見えるだけであって、実際には
個と環境の間に区分や違いはない。
このリアリティをアメリカの先住民は
「生命の織物」とよぶ。仏教では「縁起」
という。あらゆるものが相互につながり、
調和している存在の真実だ。
生命の織物の一部である私たちは、環
境のおかげで生きている。自然がお母さ
んで私たちを生み供だ。

海が主で波が従であるように、環境が
主で人間が従である。逆ではない。
人間中心に環境があるのではない。そ
れなのに人には自分中心の世界しか見え
ない。これが人の認識にそなわる本質的
な無知だ。この無知を自覚しなければ、
真の知識をえることはできない。それま
では、知覚に惑わされた幻影から覚める
ことがない。

「私は存在する」と波が考えるとき、他
の波と競争し、愛着し、やすらぎ、よろ
こび、悲しみ、怒り、現れは消えてゆく。
しかしそれは仮の現象にすぎない。波の
リアリティは分かれていない一面の海だ。
みんなひとつ。
海面は生まれもせず死にもしない。
波には形があり、エネルギーがある。
やさしい波、力強い波、はげしい波、大
きい波、小さい波……。それぞれ個性があ
つて、個別にエネルギーが作用しているよ
うに見える。しかしそれぞれの波の運動
も一つながりの海面の大いなる運動だ。
波とは海面であり、波の力は海面のエネ
ルギーだ。

そのように現象界のすべての事物と運
動はつながって相互に依存しており、個々
に存在しているのではない。
ゼロになる

自分も波の一つになってみよう。
想像しよう……。私は波、……海の表
面で揺れている。
目をとじて……。魚が頭や手足を引っこ
めるように……。意識を海の表面から波の

5 非暴力

無知

インドのアドバイタ哲学は非二元のリ
アリティをアフマンとよぶ。至福の海。
そして海面の波の世界をサンサーラとい
う。無明の海。
立ち騒ぐ波は、ほんとうは海なのだけ
れど、波間にくり広げられるドラマにす
っかり心を奪われて、永遠無限の海である
ことをすっかり忘れている。
波頭の日や口や耳は、外向きについて
いるので海面の世界しか見えない。そこ
では一切が自己中心的に、二元対立して
いる。知識もまた二元的であり、非二元のリ
アリティなど思いもよらない。波間の知
識をどれほど積もうと、その知識は幻影
にすぎない。ほんとうのことは何も見え
ない。それが無知だ。

波が海を忘れているように、私たちは
非二元のリアリティを忘れている。だか
ら煩惱が生じる。それが無明だ。
内側へ、海のなかへ、引っこめる。
意識を引っこめ……。そのままスーッと
海面を離れ、海の奥へ退いてゆく。
フーッと息を深く吐きながら、水底へ
……。深く深く……。ゆっくりゆっくり……。
沈んでゆく……。

波間の喧嘩は遠のき、揺れはなくなり、
あたりは静寂にみたまざれている。さらに、
深く、海の奥へ……。
海面で私は波だった。
いま深い海のなかで、波はどうなっ
たろうか……？
波は溶け、海になってしまった。
波は消え……。あるのは海だけ……。

その広大無辺の海、それが私だ。
個も形もなく、無限の海だけがある。
白我は海の一部でさえない。
私は消えて、ゼロになる。
無限の海だけが存在する。
それがリアリティだ。
この海が「空(くう)」とよばれる。
空の海は、意識の海であり、愛の海で
あり、光の海である。

「お金(原発)」ではないか。お金を欲し
がるのは原発を欲しがるのとおなじこと
だ。そうわかっていてもイライナイとい
えない。
なぜイライナイといえないのか？
心が満たされていないから……。

夢を見ようなされているときに「これ
は夢かな」と意識すると、夢からさめる。
そのように、このオリジナル無知を悟っ
てはじめて、人は非二元のリアリティに
めざめる。

アヒンサ

さて、一切のものが分かれていないの
なら、いったい誰が誰から奪うというの
だろうか？誰が誰を傷つけるというのだ
ろう？
自分が自分から奪っているのではない
か。分離の幻影に惑わされ、エゴの妄想
に駆られて、自分が自分を傷つけてい
るのだ。

それは波が自分の周辺にゴミを捨てて
いるようなもの。どんな遠くに捨てよう
と、それは海を汚し、結局自分に返っ
てくる。
森を壊すのは自分を壊すことなのに、
人は平気で森を壊す。海を汚すのは自分
を汚すことなのに、人は平気で汚す。環
境から奪ってもうかったと考える。文明
人のそんな錯乱した行動が環境危機を引
き起こしたのだ。

イライナイといえる心

『千と千尋の神隠し』では、湯屋の番頭
も女中も料理人もこぞって、顔なしの差
しだす金に目がくらみ、もたらって浮かれ
て乱痴気騒ぎをくりひろげる。顔なしが
金を出せば出すほど、みんなは媚びへつ

すべての生きものたち、幸せであれ、
幸せであれ」「(慈しみ)より」
これはお釈迦さまの言葉だ。
こんなふうに生きられたら、人も自然
もみんな幸福になる。
高すぎる理想、というわけではない。
そのように変わらなければ「戦争と環境
問題」は解決しないのだから。
非二元のリアリティにしたがわなけれ
ば生きてゆけないのだから。
巨大なエンジンを搭載した大型トラッ
クには、駆動力に見合う強力な制御装置
が必要なのだ。

他人から奪ってはならないように、
環境から奪ってはならない。
他人を傷つけてはならないように、
環境を傷つけてはならない。
また、
隣人から奪ってはならないように、
隣国から奪ってはならない。
隣人を傷つけてはならないように、
隣国を傷つけてはならない。

「能力あり、まっすぐ、正しく、言葉や
さしこ、柔和で、思い上がりのないもの
であるように」
足ることを知り、質素で、雑務少なく、
簡素にくらし、清らかで、聡明で、高ぶ
らず、貪ばらず。
立ちつとも、歩みつとも、座しつとも、
臥しつとも、眠らないでいる限り、この
心をしつかりたもて。



続きはぜひ
本書で！
『empty sky』
正木高志著
1冊 500円